

ジョン・メイスフィールド

7 <sup>ボースン</sup> 甲板長の愉快的体験談

水夫の町でのらくら過まごし 前借金をふいにしてたら  
浮浪ものの補助エンジン係ドンキーマンンに出会ってよ 奴あ俺を愉快的ダンスに連れ出した  
しまいにヤラム酒場に連れてかれ しこたま飲まされ  
こんな調子で あるすっげえ話を聞かせてくれた

「これは真面目な話だ 兄弟よ 男が船出するとする 5  
不定期貨物船に乗ってな すると男は神の驚異の分け前をいただくのさ  
寝床を這うゴキブリに パンに潜むミミズの類たぐいだ  
夜も働き 昼も働き 死ぬほど働くことになるんだ

だがそれじゃあない 俺が話そうとしとるんは  
俺自身のこった 最後の船での俺の話だ 10  
エスメラルダ号ちゅう不定期貨物船で ハルからフックへ向かってたんだ  
カインの烙印を押されたやつと 犯罪に手を染めた料理人も一緒だ

一週間かそこら 外洋の地獄から吹く風に波を被りながら  
ニメートル越えのうねりのある荒海をなんとか前へ進んでた  
ついに俺たちの非常用船は強打を受けて砕け 壊れて海の悪魔デイヴィー・ジョーンズに飲み込まれちゃった 15  
そんで大西洋に白い霧が立ち込め 俺たち骨の髄までキンキンよ

俺たち船をゆっくり進め 警笛を鳴らし必死で辺りを見回した  
みんな骨の髄まで凍っちゃってたが 目はじっと凝らしてた  
九日目の夜 夜間警備中だ 俺は楽しい夢から覚めちゃった  
蒸気船がいきなり船の装甲板にぶち当たったんだ 横梁ビームのちよい後ろあたりさ 20

俺がなんとか甲板に這い出ると辺りは寒くて暗かった 海は時化しけで寒くて霧が濃くて  
船は荒波で揺れに揺れて 俺も気分が悪くなってフラフラよ  
船は傾き今にも沈みかかっている 仲間らは罵り喚のしいていたが  
俺には聞こえた 波の音と 蒸気船のスクリューが逆回転してブーブーいう音が

あいつら俺たちを見捨てる気だ おい 沈むか泳ぐかしかねえぞ 俺たちや叫んだ 25  
左舷灯を草色に 右舷灯をバラ色に変え 奴らが向きを変えたのがわかった  
あの船にはカインの燃える呪いをかけ 永遠の地獄を味わわせてやるさ  
だって聞こえたんだ あの船がバックして漂流物をよけ航路に戻ってくるのがよ

そしたら仲間が身体揺らしてご登場 『無駄口叩いてんじゃねえ 30  
さもなきやてめえの脳天かち割って こんちきしょう いくらか脳みそ入れてやる  
てめえら ヨロヨロした貧乏人のくずめ 酔ってんのか お前ら馬鹿か  
てめえの身を護りてえんなら イカダでも作りやがれ』

そう言って奴は俺たちをコキ使いやがった 俺たちやかけずり回って  
角材運び 樽を運び カゴやらロープやら ボイラー板やら帆をかき集めた 35  
白かったもんはみんな これでもかってほど黒く冷たく汚れちまった  
船は水浸し 海の底の停泊地へと傾いていきやがった

船は水浸し なすすべもなく どんどん傾いていった  
ついには号鐘ごうしょうが鳴り ボイラーパイプがビービーガーガー鳴り始めた  
船が傾いて もっと傾いて 水に浸かり 沈んでいった 俺はお陀仏だったさ  
もしビービーガーガー鳴るボイラーパイプが爆発しなかったら 40

それから星がキラキラし始め 鳥が歌い始めた  
次に目が覚めたときゃ 俺は包帯を巻かれ 腕は首から吊られてた  
制服を着た商船員が一人 『んで お前さんの  
腕はどうだい 脚は 肝臓は 肺は 骨は どんな感じだい』

『ここはどこだ』俺が尋ねると 男が言うんだ 船と一緒に揺れながら 45  
『王立郵便船メアリー号の中だよ 後部貯蔵室のとこさ  
知りたきゃ教えてやる お前さんはあの世の港からかろうじて逃れたのさ  
これを飲みな』 俺はそれを受け取り飲んだ ラムが効いたね

エスメラルダ号に乗ってたうちの七人が見つかって助けられたよ  
あの親切なメアリー号に乗せられ 寝床をもらい よくしてもらった 50  
そんで遺棄英国船員としてマージー・ドックスへ (ありゃ楽しい旅だった)  
船長は褒美をいただいてたよ 商務省からの感謝のしるしってなわけさ

これで俺の話は終しまいだ」 そう言って一口飲んで唇を拭った

「こういうのが蒸気船やら帆船で見られる神の御業さ  
暗礁や霧や 轟く海に頭上で碎ける波  
夜も働き 昼も働き 死ぬほど働くことになるんだ」

55

(三木菜緒美訳)